

令和 5 年 6 月 2 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K01094

研究課題名（和文）古代エジプト、新王国時代のワイン壺の生産と流通に関する考古学的研究

研究課題名（英文）Archaeological study on the production and distribution of amphorae in New Kingdom Egypt

研究代表者

高橋 寿光（Takahashi, Kazumitsu）

金沢大学・新学術創成研究機構・研究協力員

研究者番号：30506332

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、古代エジプト新王国時代のワイン壺の生産地と流通先を明らかにし、それらが時期によってどのように変化していったのかを示すことで、当時の経済状況の変遷を具体的な資料から描き出すことを目指した。自身のエジプト現地調査によって得たデータに加え、集成を行なったエジプトの他遺跡のワイン壺を、新たに構築した編年に沿って整理したところ、「各地で類似したワイン壺が出土」という状況から次第に「地方ごとにやや異なるワイン壺が出土」という状況に移っていく点が確認できた。ここから「少数の生産地から全国的に流通」から「地方ごとに生産、流通」していくようになったと結論づけた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究より、これまで主に文字資料によって構築されてきた新王国時代像を新たに経済面から見直すことができたと考える。これまでの文字資料とは異なる視点からの研究であり、学術的意義は大きいと考えている。加えて、ある程度の長い時間で経済がどのように移り変わっていったのかという点については、時代や地域が異なるものの、現代の我々にとっても大きな参考になると考えられ、ここに社会的意義を認めることができるであろう。

研究成果の概要（英文）：This study aims to present diachronic changes in production and distribution of amphorae during New Kingdom Egypt, in order to understand the economic situation at the time. In addition to the data obtained from my research at the sites where Japanese mission is working, I also collected published materials from other sites in Egypt. These materials were chronologically examined, and the examination demonstrated that the changes had occurred gradually from 'similar amphorae were found in different regions' to 'slightly different amphorae were found in different regions'. The author assumed that such change indicates following transition: the New Kingdom amphorae were distributed throughout Egypt from a limited production area, to they were produced and distributed regionally.

研究分野：エジプト考古学

キーワード：古代エジプト 土器 生産 流通 新王国時代

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

古代エジプト新王国時代(紀元前 1570 年頃～1070 年頃)には、高さ 60cm ほどで、口が狭く、両側に取手があり、底が尖った特徴的な形をした「ワイン壺」がみられる(図 1)。こうしたワイン壺は、主に当時の物資の集散地であった王の神殿の倉庫や、副葬品として王墓、高官墓の埋葬室から出土している。

ワインとその容器であるワイン壺の製作は、当時の重要な産業の一つであり、エジプト各地から様々な産地のワイン壺が発見されている。このような背景から、応募者はワイン壺の生産と流通に関する研究を行うことで、当時の経済状況を明らかにすることが可能と考えた。

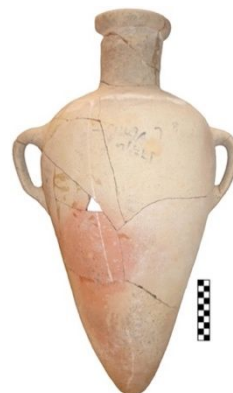


図 1 ワイン壺

2. 研究の目的

本研究では、古代エジプト新王国時代のワイン壺の生産地と流通先を明らかにすることを目的とした。そして、それらが時期によってどのように変化していったのかを示すことで、当時の経済状況の変遷を具体的な資料から描き出すことを目指した。

3. 研究の方法

研究目的を達成するために、以下の方法で研究を実施した。

(1) エジプト現地調査および報告書の集成による基礎データの入手

エジプト現地ですべてに一次資料を調査し、基礎データを入手した。調査対象は、東日本国際大学エジプト考古学研究所が発掘調査を行うダハシュール北遺跡から出土した資料である。現地調査では、土器観察、実測、写真撮影、sfm による 3D モデル作成、胎土観察を行い、基礎データを取得した。その他、これまでに応募者がエジプト南部の遺跡(アメンヘテブ 3 世王墓、ウセルハト墓)における現地調査で取得した資料も研究に加えた。

加えて、これまでに報告されたエジプト全土のワイン壺の集成も行い、研究の基礎データとした。

(2) 編年

これまでのワイン壺に関する研究によって編年が提示されているものの、一部に不明な点が残されていた。そのために基礎資料をもとに編年の再検討を行った。特にダハシュール北遺跡からはワイン壺の年代をほぼ網羅する資料が得られており、これらを用いることで更に詳細な編年を構築することが期待された。

(3) 生産

現地調査および集成によって得られた基礎データをもとにワイン壺の生産に関する研究を実施した。エジプトでは窯跡などの生産遺跡がほとんど発見されていないことから、胎土、器形、成形技法の比較を行うことで生産単位を復元した。胎土、器形、成形技法が一致するグループを同じ場所で生産されたとし、異なるグループは別の場所で生産されたと考えた。加えて、ワイン壺にはしばしば生産地などが書かれていることから(図 2) この解読を行うことで具体的な生産地を推定した。こうした研究を時代ごとに行い、時間的変化の有無を調べた。



図 2 産地名を記した文字ラベル

(4) 流通

現地調査および集成によって得られた基礎データをもとに、ワイン壺の分布を時期ごとに確認した。生産の研究結果と合わせて、どこで生産されたものが、どこに流通していったのか、流通の範囲と規模およびその通時的変化を探った。

(5) 研究のまとめ

最終的にワイン壺の生産と流通を捉え、どのような時間的変化があるのかを明らかにし、そこから新王国時代の経済状況の変遷を描き出すことを目指した。

4. 研究成果

(1) 編年の再構築

現地調査で取得した資料およびこれまでに報告された資料をもとに、ワイン壺の編年につい

て考察を行った。これまで D. アストン (Aston) により新王国時代のワイン壺の編年が提示されていたが (Aston, D.A., 2004, "Amphorae in New Kingdom Egypt", Egypt and the Levant XIV, pp.175-241.) 現地調査で取得した資料を中心に編年の検討を行ったところ、更に詳細な編年を確立することができた。特に「第 18 王朝末から第 19 王朝前半」、「第 19 王朝後半から第 20 王朝前半」についてこれまでよりも更に細かく分類することができたのは大きな成果であると考えている。より細かな編年をもとに研究を行うことで、新王国時代におけるワイン壺の変化をより正確に捉えることができるようになった。

(2) 生産地の変化

ワイン壺の生産単位を復元するために、胎土、器形、成形技法などの研究を行ったところ、時期による変化があることが明らかとなった。この変化は特に新王国時代の画期とされるアマルナ時代が境となっていた。

アマルナ時代以前のワイン壺について見てみると、基本的に Marl D 胎土のみを用いており、それらは類似した器形であることから、ごく限られた生産地において生産されたと考えられた。Marl D 胎土についてはエジプト北部に由来する胎土と考えられており、また文字ラベルにはエジプト北部のデルタ西部を意味する西の川という文字が記されているものもあることから、エジプト北部のデルタ西部が有力な生産地として考えられている (Aston, 2004, 186)。なお、この胎土は質のよい粘土を遠距離の低位砂漠の採掘地から入手したもので、焼成温度も高く、製作に手間のかかるものとなっている。また多くの文字ラベルには王の名前が記されており、王家に関連する中心的な生産地において製作されたと考えられる。

アマルナ時代より後の時代では、前述の Marl D 胎土のワイン壺に加え、Marl F 胎土と呼ばれる胎土が登場し、新たに生産地が増えたと考えられる。Marl F 胎土については前述の Marl D 胎土とは異なり、エジプト北部のデルタ東部に由来する胎土と考えられている (Aston, 2004, 195)。こちらも質の良い粘土を使用し、文字ラベルには王の名前が記されるなど、王家との関連性を伺うことができる。

加えて、アマルナ時代より後の時代では、質の落ちる Nile 胎土で作られたワイン壺も登場するようになる。Nile 胎土は、粘土がナイル川の沖積地から簡単に入手することができ、焼成温度も低く、基本的にはローカルの胎土と考えられている。胎土を調べたところ、地方によって胎土に含まれる内容物がやや異なっており、こうしたことからアマルナ時代以前に比べ生産地が増えたと考えた。現在のところ 4 つの地方ごとに生産された可能性が考えられる。なお、Nile 胎土のワイン壺には文字ラベルが描かれることは基本的にはなく、この点からも Marl D 胎土などで見られたような王家との関連性は薄くなるように考えられる。

そして出土数を見てみると、アマルナ時代より後の時代では、Marl D 胎土、Marl F 胎土のワイン壺は時代を経るにつれて出土数が減少するようになり、第 20 王朝ではほとんど見られなくなるようになる。代わりに第 19 王朝の後半からは質の落ちる Nile 胎土のワイン壺が主流となってくることが確認された。こうした点から新王国時代では、時代が進むにつれてごく限られた生産地から生産地がやや増えるようになったのではないかと考えた。

(3) 流通範囲の変化

胎土、器形、成形技法などの研究から、アマルナ時代より後に生産地が増加した可能性を指摘したが、次に流通についてエジプト全土の資料をもとに検討を行った。

出土場所を確認したところ、アマルナ時代以前は、Marl D 胎土の類似した器形のワイン壺がエジプト全土から出土しており、こうした点からごく限られた生産地で生産され、そこから広い範囲に流通していると考えた。

そして、アマルナ時代より後になると、Marl D 胎土、これに加えて Marl F 胎土のワイン壺が引き続きエジプト全土で出土しており、広い範囲に流通している。ただし、時代を経るにつれて出土数が減少していくようになる。

アマルナ時代より後に新たに登場した Nile 胎土のワイン壺についても同様にエジプト全土での出土が見られる。胎土、器形を比較したところ、少なくとも 4 つ地方ごとに相違が見られることから、これらの地方ごとに流通するようになったと考えた。そしてこれらが第 19 王朝後半から主流となる。こうした点から、生産地がやや増えたことによって、流通範囲が減少するようになったのではないかと考えた。

(4) 研究のまとめ

本研究では、ワイン壺の生産と流通に関する研究を行ったところ、新王国時代の画期であるアマルナ時代を境とし、「各地で類似したワイン壺が出土」という状況から次第に「地方ごとにやや異なるワイン壺が出土」という状況に移っていく点が確認できた。ここから「少数の生産地から全国的に流通」から「地方ごとに生産、流通」していくようになったと考えた。

新王国時代において、アマルナ時代を境に生産地が増加し、流通範囲が減少するという傾向については、これまで応募者が行った青色彩文土器の研究によっても類似した傾向が得られている。青色彩文土器では地方で生産、流通をコントロールするようになったことからアマルナ時代より後になると、地方が力を持つようになったためではないかと結論づけた (Takahashi, K., 2021, "Simplification in Production Technology of Blue-Painted Pottery in New Kingdom

Egypt”, *Bulletin de liaison de la ceramique egyptienne* 30, pp.5-33.; 高橋寿光, 2019, “古代エジプト、新王国時代の青色彩文土器の生産地の増加について”, *オリエント* 62-2, pp.122-142.)。また類似した状況は第一中間期のステラ(奉納用石碑)を対象としたモレノ・ガルシアによる研究でも示されている(Garcia, J.C.M., 2015, “Climatic change or sociopolitical transformation? Reassessing late 3rd millennium Egypt”, in Meller, H., Arz, H.W., Jung, R. and Risch, R. (eds.), *2200 BC - A Climatic Breakdown as a Cause for the Collapse of the Old World?*, Halle, pp.79-94.)。

同様に、ワイン壺においてもアマルナ時代以降、地方で生産、流通をコントロールするようになったことから、「全国的な経済圏」から「地方経済圏」に移っていったのではないかと考える。

(5) 国内外における位置づけとインパクト、今後の展望

これまでのワイン壺に関する研究では編年や産地推定に関する研究が行われてきた。その結果、編年の大枠が構築され、また、概ねどのあたりが生産地であるかについても明らかになってきた。一方で、これまでの研究では、遺跡ごと、時代ごとに個別に研究が行われており、エジプト全土を対象にした分析や通時的な考察が行われていなかった。そのため全体の様子が不明で、生産、流通、経済状況について大まかに可能性を提示するに留まっていた。こうした点を踏まえ、本研究はこれまでの個別の遺跡で行われていた基礎研究をもとに、新王国時代エジプト全体の生産、流通、経済状況を復元するという応用研究と位置づけることができる。

また今回の研究期間では新型コロナ・ウィルスの影響やエジプト政府の許可の問題などから現地における理化学分析が実施できなかったため、この点が今度の課題として残った。この点についてはまた改めて課題を設定し、理化学分析から今回の研究の裏付けを行っていきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 4件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Kazumitsu Takahashi	4. 巻 -
2. 論文標題 Blue-painted pottery production system in Northwest Saqqara and Dahshur North from the Amarna Period to the reign of Ramesses II	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ABUSIR AND SAQQARA IN THE YEAR 2020	6. 最初と最後の頁 285-292
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Keita Takenouchi and Kazumitsu Takahashi	4. 巻 -
2. 論文標題 Pottery	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Dahshur North [II]: New Kingdom Tomb of Ipay and its Vicinity	6. 最初と最後の頁 60-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Kazumitsu Takahashi	4. 巻 30
2. 論文標題 Simplification in Production Technology of Blue-Painted Pottery in New Kingdom Egypt	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Bulletin de Liaison de la Ceramique Egyptienne	6. 最初と最後の頁 5-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Kazumitsu Takahashi	4. 巻 31
2. 論文標題 The function of New Kingdom pottery vessels from Tomb 30 at Dahshur North	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Bulletin de Liaison de la Ceramique Egyptienne	6. 最初と最後の頁 201-233
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kazumitsu Takahashi	4. 巻 -
2. 論文標題 The Possible Meaning of Intentional Breakages on New Kingdom Amphorae from Dahshur North	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 The Star Who Appears in Thebes Studies in Honour of Jiro Kondo	6. 最初と最後の頁 465-473
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋寿光	4. 巻 65-1
2. 論文標題 エジプト、ダハシュール北遺跡の第30号墓から出土した新王国時代の土器の機能について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 オリエント	6. 最初と最後の頁 19-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 高橋寿光
2. 発表標題 土器からみた古代エジプト新王国時代の埋葬
3. 学会等名 日本オリエント学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高橋寿光
2. 発表標題 古代エジプト新王国時代のアンフォラの編年について
3. 学会等名 日本オリエント学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	阿部 善也 (Abe Yoshinari) (90635864)	東京電機大学・工学研究科・助教 (32657)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------